九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

一九三二年の増税法案に就いて : アメリカ財政史の一節

井手, 文雄

https://doi.org/10.15017/4150411

出版情報：經濟學研究. 3 (4), pp.202-, 1933-12-30. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

一九三二年の增稅法案に就いて

——アメリカ財政史の一節——

井手文雄

（十二月二十一日發表）

一九三二年の增稅法案は、フーヴアー內閣に於ける、或は金融資本家側に於ける、財政收支均衡への努力の最後の武器であつた。何故に金融資本家は恐慌克服の爲めに國家財政の收支均衡を要求したのか。かくして生れた增稅法案は如何なる具體的意圖を有し、如何なる社會經濟的意義を內包してゐたのか。而してこの法案は何故に失敗したか（聯邦政府財政の一九三三年度決算と照應せしめて檢討す）。更に亦この失敗は如何なる社會經濟的意義を有してゐたか。以上の諸點を根本資料によつて仔細に吟味し、增稅法案の慘たる失敗の中に、フーヴアーのデフレ政策より、ルーズヴエルトの統制的インフレ政策への推移の必然性を求むると共に、かゝる政策の推移の背後に潛める、金融資本家と產業資本家との相剋の姿及び財政の本質への認識の發展（即ち從來社會的被制約性の半面のみを理解せられてゐた國家財政が更に社會的制約性といふ重大なる他の半面をも理解せらるゝに至つた事情）等を指摘す。